

ポピュラー文化ミュージアムと 記憶の社会学

大阪市立大学*石田佐恵子

I. ポピュラー文化ミュージアムの増殖

- *ポピュラー文化のミュージアムへの展開は、いつどのようにして進行したのか？
この10年間の間に開館し、閉鎖された無数のミュージアム・・・
- *成功する／失敗する「ポピュラー文化ミュージアム」とは？
- *「国立マンガ喫茶」への批判的視線
- *実在する場所と空間、モノ →持続可能な文化アーカイブ構想

II. 「記憶の社会学」の主題

記憶とは何か

- *社会学が関心を持つのは、日常生活における集合的営みとしての記憶（集合的記憶）
- *過去は物質や空間に刻まれ、保管されている。その痕跡を通して、現在の視点から過去が再構成されるとき、当事者に限定されない複数の記憶が「生きられた歴史」として経験される。
- *記憶とは、過去を「保存」し「再生」することではなく、現在の視点から過去を「再構成」すること（アルヴァックス、浜 2007）。

集合的記憶と3つの〈物語〉

*記憶の社会学は、過去の痕跡が刻まれた空間や物質の配置、それらをめぐる人びとの活動の編成を観察することで、記憶を研究する。

- ①大きな〈物語〉と集合的記憶 → 博物館、博覧会、戦争／災害ミュージアム
- ②個人的〈物語〉、トラウマ、痕跡 → メモリアル、記念館、路上の花束
- ③メディアの紡ぐ〈物語〉 → ポピュラー文化ミュージアム

メディアの紡ぐ〈物語〉とミュージアム

- *〈ポピュラリティ〉をめぐる政治闘争 ポピュラーであることの闘い
- *ポピュリズム、表層性、断片化
- *物質性、モノとしての消費、商業主義

テレビジョンに求められる番組の多様性とは、その番組にアクセスすることを認められた人びとの社会的地位を多様化するたぐいのものである。アメリカのケーブルテレビやイギリスのチャンネル4はこの方向に動いているが、このような多様性は、商業的な放送制度の内部では実現しそうにない。ケーブルテレビやチャンネル4がこの方向に動いていることは非常に貴重なことではあるが、それらはいまだにマイノリティの視聴者に話しかけるマイノリティの声のままである。ポピュラリティをめぐる政治的闘争は、商業テレビの場で闘われなければならない。本書で中心的に論じているのは、この種の闘争なのである（フィスク 1996）。

III. ミュージアムの4類型

帝国主義批判、植民地主義批判とミュージアム

*ミュージアム＝文化的アイデンティティと科学的知識内容のための組織的原理を表象する（クレイン 2009）

*批判へのエクスキューズとしての、インタラクティブ性、ポピュラー文化の取り込み

ミュージアムの4類型（マースティン、伊藤 2009）

②市場原理の産業	①聖堂
③植民地化する空間	④ポスト・ミュージアム

*ポスト・ミュージアムは、自らの責務、戦略、意志決定のプロセスを明確にし、たえまなく表象／再現の政治学が要求する仕方で評価し判断する。訪問者は受動的な消費者ではなくその構成者となる。複数の記憶がミュージアムに参画する。多義性と揺れ動くアイデンティティを呈示する。→文化的理解を深め、社会的不公平を是正する契機となる場である。

IV. ポピュラー文化ミュージアムとは何か

*コレクション／データベース／アーカイブ（村田 2007、石田・岩谷 2009）

*具体的な場所・空間・痕跡を、4類型との関係から読み解く

*ポスト・ミュージアムとしての、アーカイブの可能性

参考文献

浜日出夫（2007）「歴史と記憶」長谷川ほか『社会学』有斐閣

小笠原臣也（2007）『戦艦「大和」の博物館』芙蓉書房

伊藤博明（2009）「解題 ミュージアム（論）の彼岸」S・A・クレイン編著『ミュージアムと記憶』ありな書房

村田麻里子（2007）「ミュージアムにおける『モノ』を巡る論考」『京都精華大学紀要』第33号